

第十七章

流 謫

——失われたホームを求めて——

小宮 彩加



ウィリアム・スプレット『エクセター大聖堂』（1846年頃）

第一節 生まれながらのエグザイル

「ぼくは生まれながらのエグザイルなんだ (I was born in exile — born in exile.)」(第一部第五章)とは、『流謫の地に生まれて』(一八九二年)の主人公ゴドウィン・ピークの言葉である。ピークはこう自分に言い聞かせることで自らを奮い立たせ、家族や故郷とのつながりを断ち、自分に相応しい環境を求めて旅立つ。ギッシングの作品には、時代や置かれている環境に違和感を抱いたエグザイルが多い。ゴドウィン・ピークの他にも、『無階級の人々』(一八八四年)のオズモンド・ウェイマーク、『三文文士』(一八九一年)のエドウィン・リアドン、『渦』(一八九七年)のハーヴェイ・ロルフのように、印象的な主要登場人物にはエグザイルが多い。ギッシングはエグザイルを描くときに、その力量が最大に発揮された作家だったといえよう。

「エグザイル」とは日本語にするのがなかなか難しい単語である。「流謫、追放、亡命、流刑、長期の異郷生活」などという意味がある。ユダヤ民族や政治的に国を追われるようになった人のように、生まれ育った故郷から切り離された者を指すことが多い。しかし、ギッシングの作品に描かれるエグザイルたちは、れっきとしたイングリランド国民である。それでも彼らは、自分は根なし草だという意識を強く持っているのだ。彼らは「ホーム」——家、家庭、故郷などすべてを含む、心の拠りど

ころ——を失ってしまったエグザイルなのである。

ギッシングの小説の登場人物にエグザイルが多いのは、彼が生きた後期ヴィクトリア朝社会の特徴を反映していることである。歴史家ホブスボームが「革命の時代¹⁾」と呼んだ十九世紀初めを経て、ヴィクトリア朝のイギリス社会は目まぐるしい変化を遂げた。そのような中で、変化についていけなくなったり、選ぶ道を誤ったりして、自分の居場所を失ってしまった若者がたくさんいたのである。

実はギッシング自身も、そうしたエグザイルの一人だった。そして、ギッシングのエグザイル性が最も強く投影されているのが、さきほどの『流謫の地に生まれて』のゴドウィン・ピークなのである。一八九二年五月二十日にドイツ人の友人ベルツに宛てた手紙の中で、ギッシングは「ピークは私自身である」(Letters 5: 36)と述べているが、実際、これは自伝的要素が非常に強い作品である。ギッシングもピークも、ロウアー・ミドル・クラスの出身であり、父親を早くに失っている。大黒柱を失って家庭は貧しくなるが、どちらも頭脳明晰だったために、奨学金を得て大学進学を果たす。しかし、それぞれある事情から中途で大学をやめざるを得なくなるのだ。そして、この作品を書いた時点ではギッシングには知る由もないことだが、ピークとギッシングは皮肉なことに、「死ぬときもエグザイル」だった点でも一致する。

『流謫の地に生まれて』についてギッシングは、「書かなく

てはならない作品だった」(Levens 5: 36)と述べている。過去と訣別し、新たなスタートを切るためには、徹底的に自己と向き合い、トラウマとなっている過去の出来事を持ち越えなくてはならなかったのである。冒頭で引用した、「ぼくは生まれながらのエグザイルなんだ」というピークの言葉も、痛々しいまでの自己分析によって生じたギッシング自身の言葉として受け止めることができるのだ。

ギッシングとピークが「生まれながらのエグザイル」という意識を持っていたのは、彼らがそもそも生まれ故郷と呼べる場所を持っていなかったことにも起因する。ギッシングは、今からちょうど百五十年前の一八五七年十一月にイギリス北部、ヨークシャーのウェイクフィールドに生まれた。エリザベス・ギヤスケルの作品に『北と南』(一八五四〜五五年)というのがあ

るが、イングランドの北部は、産業的にも精神的にも、南部とはまったく異なる風土であり、またヨークシャーを中心とした北部の英語の訛りは独特なものである。そこに生まれ育てば誰でも、ヨークシャーの若者としての強いアイデンティティを持つようになりそうなのであるが、実はギッシング一家は、イースト・アングリアから来たばかりの新参者だった。葉屋を営んでいたギッシングの父親は、長男ジョージの誕生の前年の一八五六年に、イングランド東部の田舎から、炭鉱と繊維業を中心とした産業で栄えていたヨークシャーの町ウェイクフィールドへやってきたのだった。「最初のエグザイルはギッシングの

父だった」(Tindall 29)とティンダルは述べているが、ヨークシャー文化に馴染んでいない家庭に育ったことは、ギッシングの精神に少なからず影響を与えていたことだろう。さらに、もともと違和感を抱いていた故郷を一層遠ざけることとなったのが、ギッシングが起こしたオーエンズ・カレッジでの窃盗事件である。売春婦と恋愛関係になり、彼女を更生させるために学内で盗みを繰り返し、現行犯で逮捕され、奨学金で通っていた学校を退学になるとは、家族にとっても大変な不名誉だった。この一件を家族はひた隠しに隠したので、地元では何があったのか具体的には知られていなかったかもしれない。しかし、過去の犯罪の秘密を抱えるようになったギッシングは、その後は大手を振って故郷に戻るということはできなくなってしまっただろう。

ゴドウィン・ピークも、故郷として愛着を感じられる場所を持たない点で、ギッシングと同じである。ピークはウェストミンスターに生まれ、グリニッジで幼少期を過ごし、その後トワイブリッジに住むようになったとされている。何ヶ所も転々としたために、ピークは「どの地区にも結びつきが感じられなかった」(第二部第四章)。ロンドンについても、「もう十年は住んでいるけれど、ロンドンを自分の場所(home)だとは全然思えないんだよ」(第二部第四章)と述べている。

しかし、ギッシングとピークの疎外感やエグザイルとしての意識は、故郷と呼べる場所を持っていないことだけが原因では

ない。そこでここからは、『流謫の地に生まれて』のゴドウィン・ピークを手がかりにしながら、ギッシングのエグザイル意識の根源を探りたいと思う。

第二節 無階級の人々

ぼくはまったくどの階級にも属していないのだが、もし君がぼくの階級のことを考えたことがあったとしたら、君はぼくをどの位置に置くのだろうかと考えずにはいられないんだ。

(第五部第二章)

ゴドウィン・ピークは、ホワイトロ・カレッジの学生時代、唯一親しくしてくれたアッパー・ミドル・クラスの友人バックランド・ウォリコムウォリコムの妹シドウェルに愛を打ち明けるときに、このような不安を口にする。自分では自らを「自然が生み出した貴族」(第一部第二章)だと考え、教養のレベルが同程度のアッパー・ミドル・クラスの人たちと対等に付き合う権利があると自負していたものの、実際には彼らから自分はどう見られているのか、自信が持てなかったのだ。

一八八三年出版のギッシングの二作目の長篇小説は『無階級の人々』というタイトルだが、『階級のない (unclassed)』ことは、ギッシングの描くエグザイルたちの重要な特徴である。これはギッシング自身が、どの階級にも属していないという意識

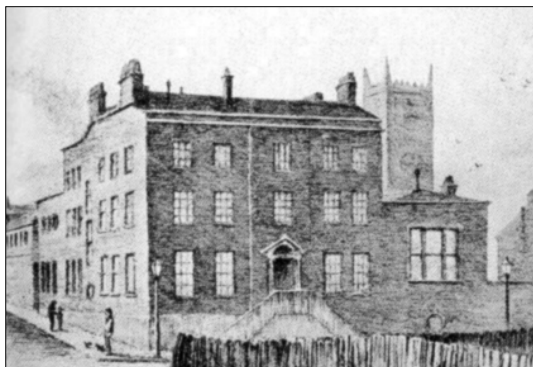
を持つ、階級社会でのエグザイルだったためだろう。薬屋を営んでいた父は階級意識が強く、ギッシングは同じロウアー・ミドル・クラスであっても、子供の頃、近所の商店の子とは遊ばせてもらえなかったのだ。

私の子供時代は幾分孤独なものだった——学校の友達以外で、私たちがよく会っていたのはヒック家くらいしかなかった。……私たちは他の商店の人の家族とはまったく接触がなかった。それで私たちは社会の二つの階級の間で宙ぶらりんになっていた——それからの人生でもずっとそうだったように。

(Commonplace Book 23-24)⁽²⁾

父親譲りの階級意識は、ギッシングを生涯、階級のエグザイルにしてしまう。オーエンズ・カレッジ(図①)時代、奨学金で入学したギッシングはほかの裕福な家庭の学生に対して劣等感を抱き、孤立していたという。一方で、経済的には近いレベルの労働者階級の人々に関しては、彼らの無教育で、品のないところを嫌悪していた。ギッシングはどの階級にも属することができず、まさに宙ぶらりんな存在だったのだ。

さらにギッシングの場合は、労働者階級の女性と結婚したため、自らリスベクトブルな社会から距離を置くことになってしまった。最初の妻ネルは、アルコール依存症の売春婦で、明らかにレディではないことが見て取れたという。同じ轍は踏むな



図① オーエンズ・カレッジ (1874年頃)

と周囲から忠告されたにもかかわらず、寂しさに耐えられなくなつて結婚してしまつた二度目の妻イーデイスも下層階級の出身だつた。教養のなさや下品な話し方のために、ギッシングは彼女たちを人前には出せないと考えた。これらの結婚によつても、ギッシングは階級的コンプレックスを強めてしまつたのである。

ヴィクトリア朝においては、十八世紀頃までは厳然とあつた階級の壁は、越えることが可能なものになつていた。そのよう

な社会で立身出世を目指す若者にとつて、何よりも大切なのは教育だつた。^③一八五九年に出版され、一年間で二万冊売れるほどのベストセラーになつたサミュエル・スマイルズの『自助論』は、自助の精神と勤勉で貧しさから抜け出し、富と名声を獲得した数多くの実例を挙げているが、その中でスマイルズは教育を身につけることがいかに大切かを説いている。ジェフリー・ベストが指摘しているように、ヴィクトリア朝のイギリスでは、教育は階級を上げるための競争における「切り札となつた」^④のである。だからこそ、ギッシングは我武者羅に勉学に勤しんだのだ。そしてピークも、「十分な熱意を持つて目的を目指せば」、「自然が生み出した貴族」(第一部第二章)は本物の貴族になれると信じて励んだのだつた。

しかし、お金を持たないのに高度な教育を身につけてしまつた貧しいロウアー・ミドル・クラスの若者を持ち受けていたのは、どの階級にも属せない、孤独な人生だつた。彼らは自分の生まれた階級の仲間の教養のなさを軽蔑するようになり、戻るべきところを失つてしまふ。ホワイトロウ・カレッジで三年間過ごし、トワイブリッジの実家に帰つたピークも、そのような寂しさを味わうのだ。

ゴドウィンにはつきりとしていたのは、以前の自分があるかに遠い存在になつたということだ。彼はもはやトワイブリッジには合わなくなつていたし、彼の仲間とも仲間ではなくなつてい

た。

(第一部第二章)

種商人となった弟のオリヴァーや、宗教にのめり込むようになった妹のシャーロットを見て、彼らと自分の間に大きな溝ができてしまったとゴドウィンは感じるようになる。これは恐らくギッシング自身が、オーエンズ・カレッジから故郷に戻ったときに抱いた感情なのであろう。

属している社会的階級を失ったピークとギッシングの「無階級さ」を如実に表しているのは、古典教育に対する彼らの情熱である。ギッシングは、オーエンズ・カレッジ時代は古典科目が得意で、将来は古典学者になるものと思われていた。学校を離れてからも古典の勉強は継続し、ロンドンで日々の糧にも窮するような生活を送っているときでさえも、古典文学を読み、ギリシャ語やラテン語の学習を続けていたことが日記や手紙に記録されている。

また、彼が好んだ旅行先も古典文学と関係のある土地ばかりだった。一八八八年十月、作品が売れて初めてまとまったお金を手にしたギッシングは、夢にまで見たローマと、ナポリ、フイレンツェ、ヴェネツィアを訪れた。その翌年十一月には、アテネに行き、至福の一ヶ月を過ごした後、ナポリを再訪し、そこに二月二十日まで滞在した。『イオニア海のほとり』（一九〇一年）は、一八九七年十一月、三回目の旅行でカラブリア地方を訪れたときの旅行記である。

ギッシングと同様ピークも古典学習を生涯続けた。ホワイトロー・カレッジでは彼はギリシャ語、ラテン語などの古典科目を中心とした人文系を専攻していた。そして、叔父から大学の目の前に「ピーク食堂」を開店する計画を聞いて、その屈辱に耐えられずに学校をやめてしまっただけから、古典の勉強は続いていた。バックランドの父親から「古典の勉強を続ける時間はあるのかい？」と聞かれたピークは、「ときどき、思い出したようにしています。ときには一ヶ月か二ヶ月、古典に戻ることもあります」（第二部第四章）と答えている。

古典教育は、功利主義を信条とするヴィクトリア朝の人々から鋭い批判の目を向けられた学問分野だった。イギリスの学校教育の中で最も伝統的で、かつては唯一の学問でもあった古典だが、実利を優先する風潮は、古典中心の学校教育にも改革を求めたのである。ディケンズの『ハード・タイムズ』（一八五四年）の中で実業家トマス・グラッドグラインドが経営する学校では、「事実のみ」を詰め込み、それ以外の何の役にも立たない無駄な知識は一切教えてはならない、という原則に基づいた教育が施されていた。ディケンズの描写はやや誇張されているものの、教育の現場に実利優先の精神が浸透していたのは事実である。そのような流れの中で、まったく役に立たない古典科目は批判の矢面に立たされたのであった。

最も長い伝統をもつオックスフォードやケンブリッジでも、古典教育の改革は実行された。ギリシャ語、ラテン語の古典言

語と古典文学に偏りすぎているという批判を受けて、一八三〇年にオックスフォードで、それから一八五一年にはケンブリッジでも、古代史がシラバスに加えられた⁵⁾。また、カリキュラムも改正され、オックスフォードの学生は従来の人文学課程 (Greats) を選ばなくとも、古典教育の比重の緩和された公式第一次試験 (Moderations) のみで卒業することも可能になった。

しかし、一方でこのような古典教育批判は、当初改革を求めた者たちも想像しなかった結果をもたらしたのである。古典の教養は、仕事や生活の役に立たないからこそ存在意義があるのだと考えられるようになった。リチャード・ジェンキンスが「政治家や批評家が古典からの引用を多用したことの大きな理由のひとつは社会的なものだった」と述べているように、古典の知識は「紳士」であることの証になったのである⁶⁾。そうすると、古典教育に批判的だった新興の実業家たちも古典教育を無視することができなくなってしまう。彼らも自分の子供には伝統的な古典教育を身につけさせることを選んだので、結果的に後期ヴィクトリア朝までに、古典教育は廃れるどころか、逆に「紳士の学問」として確固たる地位を確立することとなった。

このような古典教育のもつ階級性については、ギッシングも認識していたのだろう。『流謫の地に生まれて』の中でも、「ギリシャ語やラテン語などの古典教育は、少数の者たちの特権であり続ける限り、貴族的性格を持つのは当然のことだ」(第四部第一章)と述べている。その古典教育に、貧しいロウアー・

ミドル・クラスのギッシングやピークは、執着してしまったのである。のちにピークは、「ぼくが人文系に行ってしまったのは間違いだったんだ——ギリシャ語とかラテン語とかさ。ぼくは科学だけにおくべきだったんだよ」(第一部第四章)と振り返っているが、奨学生が古典教育を選択するというのは分不相応なことだったのである。

ヴィクトリア朝のイギリス社会がいくら階級的に流動化したといっても、実際には階級の壁が完全になくなったわけではなかった。ギッシングもピークについて、「ここイングリッドでは、身分が低く、財産を持たない彼はウォリコム家のような人たちとは永久に仲良くなどないのだ」(第二部第三章)と述べている。ピークは、バックランドの父ウォリコム氏との会話の中で古典からの引用をしたことによって、彼と打ち解けることができた。しかし、バックランドには、家族が階級の低いピークと親しくなることが耐えられなかった。聖職に就きたいというピークの意志についても、バックランドは悪意に満ちた偽善だと警戒し、それを証明してみせようとするのだ。いくら努力して古典教育を身につけたとしても、「精神の紳士」は本物の紳士とは認められないというのが現実だったのだ。

ギッシング自身も、ローマ旅行から戻ったときにこの幻滅を強く味わっていたのだ。初めて訪れたローマから、妹のエレンに宛てて書いた手紙は、喜びに満ち溢れたものだった。それまで、貧民街に暮らしながらも、熱心に古典の勉強を続けて

きたギッシングは、ローマを実際に眼にしたことにより、古典の教養をさらに深めることができたと思つたのである。そして、それによって、「誰とでも対等に話すことができる」ようになったと考えたのだった（*Letters* 3: 331-32）。しかし、意気揚々とイギリスに帰国したものの、旅行前と生活は何ひとつ変わらず、まわりにいるのは無教育な貧民だけだった。古典への造詣の深さでは上流階級の知識人と同じ、あるいはそれ以上だと考えて自信をつけていただけに、彼はますます耐えがたい疎外感と孤独感に苛まれたのであった⁷。

『流滴の地に生まれて』では、古典教育を取り巻く閉鎖的な階級性がプロットの中で非常に巧みに使われている。特に第一章の、ホワイトロー・カレッジにおける学年末試験の成績優秀者の表彰式を描いた部分は秀逸である。ギッシングの通ったオーエンズ・カレッジをモデルにしたと思われるホワイトロー・カレッジは、九年前に設立された、科学などの新しい学問分野の教育で評判の高い大学である。通っている学生は、主に産業の繁栄したミッドランド地方の新興の富裕層の子供たちだった。ここでピークは卒業後の職業に役立つ理系の学問を専攻すべきところだが、ピークは人文系を専攻し、その上で単位にならない理系の科目を履修していた。表彰式でピークが優等賞を獲得したのは、論理学、道徳学、化学と地学だった。一方で、咽喉から手が出るほど欲しかったであろう特別古典科目賞と、ギリシャ語やラテン語などの専門科目の一等賞はことごとく逃して

しまい、二等賞に終わった。それらの科目の一等賞はブルーノ・チルヴァーズという、オックスフォードに進学が決まっていたアッパー・ミドル・クラス出身の学生に渡ってしまう。ピークが古典科目で優等賞を得られなかったことは、将来の更なる挫折を予見させる。この日味わった敗北感と屈辱を、十年後、同じチルヴァーズを相手にピークは再び味わうことになる。

ギッシングと親しかったH・G・ウェルズは、ギッシングと同じように貧しい家庭に育ち、奨学金で学校に行つた。しかし、ウェルズの場合はギッシングとは違って、人文系には進まずに、科学師範学校でT・H・ハクスリーのもとで生物学を学んだ。ウェルズは人生を変えてくれた科学分野の教育に誇りを持っていたので、古典教育コンプレックスなどは微塵も感じていなかった。第二次世界大戦中の一九四一年四月二十二日のジョージ・バーナード・ショーに宛てた手紙の中で、「ローマなんて大嫌い」で、古代ローマの遺産が爆弾で「粉碎されたとしても何とも思わない」と書いているほどだ⁸。一八九八年に一ヶ月ほど、ローマでウェルズを案内したギッシングが、もしこれを聞いたら大変なショックを受けただろう。

さらに、古典教育はギッシングが作家として成功する上でマインナスに作用したとウェルズは考えていた。ギッシングは「誤った教育を受け」、親譲りの上流気取りと古典教育が「足かせになった」ために、どのようなものが時代に求められているのか、またどのような作品が人の氣に障るのかも分かっておらず、作

家として成功することができなかったのだと後に評している。

確かにギッシングはウエルズの『タイム・マシン』（一八九五年）のようなベストセラー小説を書くことはできなかった。しかし、古典教育はギッシングにとってマイナスばかりではなかったと考えられる。古典文学の世界はギッシングに純粋な喜びを与え、彼の人生を豊かにした。その一方で、古典教育の持つ閉鎖性がギッシングに優越感を感じさせ、同時に疎外感をも感じさせたのだらう。複雑な古典教育コンプレックスを抱くギッシングだったからこそ、後期ヴィクトリア朝に特有な無階級のエグザイルを描くことができたのだと思われる。ギッシングは、一八九五年二月十日に友人ロバーツに宛てた手紙の中で、次のように語っている。

強く言っておきたいのはこういうことだ。私の作品のうち、最も特徴的で、最も重要なのは、我々の時代に特有な若者の階級を扱った部分だ。つまり、高い教育を受け、そこそこの育ちではあるのに、お金を持っていない若者たちだ。(Letters 5: 296)

ここでギッシングがいう高い教育とは、すなわち古典教育のことだらう。身分不相応の古典教育に対する偏愛こそ、ギッシング文学の真髄を作ったといえるのではないだろうか。

第三節 ホーム、スウィート・ホーム

ギッシングの作品では、登場人物がどのようなところに住んでいるのが詳しく描写されていることが多く、住まいはそこに住む人をあらわすキャラクター・インデックスとなっている。エグザイルの登場人物の場合、彼らが住んでいるのはフラットやロッキングというのが相場である。フラットやロッキングなどは「ホーム」にはなりえないと、ギッシングは考えていたようだ。ゴドウィン・ピークの数少ない友人の一人、クリスチャン・モクシーも、ピークと同様にロンドンで孤独な生活を送っているエグザイルなのだが、彼は「ホーム」に対する憧れを口にするときに次のように言っている。

ぼくは、快適なホームの雰囲気が好きなんだ。もし自分のホームを持っていたなら、きつとうまく行くと思うんだ——色々なことがね。ぼくは、ほら、ロッキングに住んでいるだらう？ 自由な気分を味わうことはできるけれど、でもそうはいってもね。(第一部第四章)

フラットやロッキングに住んでいることが、彼らの抱く疎外感を強めているようである。

ギッシングの描くエグザイルたちが、ロンドンのフラットや

ロッキングに住んでいることは、当時の実情と合致する。ヴィクトリア朝時代は、農村から都市へ人口が流入し、それに伴い、都市での住居の需要が急増した。その一方で、アップバー・ミドル・クラスを中心に、人々がロンドンから郊外へ出て行つたので、住み手のいなくなった住居があった。そこで以前は一世帯で住んでいた建物を分けて、労働者階級の複数の世帯が住む形式の間貸しのロッキング・ハウスが増えたのである。十九世紀半ばには、ロンドンの四分の三がロッキング・ハウスになっており、労働者のほとんどがロッキング住まいという状況だった⁽¹⁸⁾。

ギッシング自身も、ロンドンではロッキング・ハウスに住んでいた。ヴィクトリア朝では引越しは「日常茶飯のことであつた」⁽¹⁹⁾ようだが、それにしてもギッシングの引越しの多さは目を引く。一八七七年十月にロンドンにやってきたときから、一八八四年十一月にコーンウォール・レジデンスに入居するまでの六年間に、彼は十四回も引越しをしているのである⁽²⁰⁾。このことにも、彼が安住の地を探し求めるエグザイルだったことが表れていると言えよう。

ギッシングが最初に住んだのは、キングズ・クロス駅に程近いスウィントン・ストリート六十二番地だ。キングズ・クロス駅は、彼の出身地ヨークシャーとロンドンをつなぐ鉄道の発着駅であるために親しみを感じたのだろうか。スウィントン・ストリート以降もキングズ・クロス駅の近辺で何度も引越しを重ねているのだ。一八七八年一月からはコルヴィル・プレイス二

十二番地に住んでいた。同年十一月からは、ネルと共にガワリー・プレイス三十一番地に居を構えるが、翌年にはハントリー・ストリート三十五番地に移る。ここはその後、番地が七十に変わったが、建物自体は現在でもギッシングが住んでいた当時のままの状態で残っている(図②)。一八七九年四月に三百ポンドの遺産を受け取つたのを機に、エドワード・ストリート三十八番地(現在はヴァーナンデル・ストリートに名前が変更されている)にロッキングを見つけ、十月二十七日にネルと正式に結

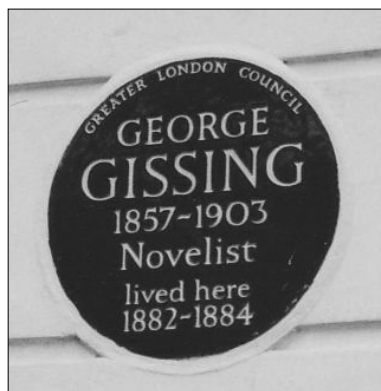


図② 現在のハントリー・ストリート70番地

婚し、そこで『暁の労働者たち』(一八八〇年)を執筆している。小説を出版する前のギッシングは、主に家庭教師で収入を得ていた。ロッキングから生徒たちの住むチェルシーまでは、交通費の節約のために朝五時に起きて二時間かけて歩いて通っていた。一八七九年十一月から翌年七月まではイズリントンのハノーヴァー・ストリート五番地に引越した。その後はウォーニントン・ロード五十五番地、ガワー・プレイス十五番地、ドーチエスター・プレイス二十九番地、オークリー・クレセント十七番地、ミルトン・ストリート六十二番地、ラトランド・ストリート十八番地などを転々とした後、一八八四年十一月二十四日からコーンウォール・レジデンス七Kに住むようになった。イギリスでは、著名人の住んだところにブルー・ブラークが貼られているが、ギッシングの場合はチェルシーのオークリー・クレセントに貼られている(図③)。

ギッシングの短篇作品のひとつに「立派な下宿人」(一八九六年)というのがある。ひとつのロッキングに十二ヶ月と続けて住んだことがないジョーダン氏が、大家として申し分のない女性と出会い、彼女と結婚する話である。ジョーダン氏はどんなに気に入ったロッキングを見つけても、住んでいるうちに大家の態度で嫌なところが目に付くようになって引越してしまふ。いくつもロッキングを渡り歩いたギッシングだからこそ思いついたプロットの作品である。

ピークの場合も、ロンドンに暮らすようになって最初の六年



図③ チェルシーのオークリー・クレセントにあるギッシングの青の記念銘板

間は、満足のいくロッキングを見つけられずに、何度も引越したと書かれている。どこに行っても、不正や悪辣さ、嘘や悪口、口論、酔っ払い、などという、「大都会の下宿屋の貸主の特徴となつてゐるあらゆる不快な行為」(第二部第二章)のために引越しを余儀なくされたのだった。

ピークがロンドンで現在住んでいるロッキングは、何度も引越しを繰り返した末に四年前に偶然見つけたものだ。植物学者の家の二階の、空いている二部屋を間借りしているのだが、フランス人の奥さんの作るおいしい食事や全体的な趣味の良さが気に入っていた。ピークの部屋には「絵はないものの、様々なものがあちこちに飾ってあって、なるべくロッキングに見せないように多大な努力を払っているのがわかった」(第二部第二章)

と書かれている。しかし、ロッキングとしては申し分ないところであつても、所詮ロッキングはホームにはなり得ないのである。ピークはロッキング住まいの不安定さを感じていた。

ハルペリンも指摘しているように、ロッキングはピークにとって「自身の社会的変則性を象徴するもの」(Halperin, 1974)だったようだ。自分のものではない家に間借りしている下宿人という身分は、社会にも間借りしているかのような、存在の不安定さを強く感じさせたようだ。実際、ピークが次のように考える場面がある。

彼はよそ者——下宿人^{ロツジャイ}だった。今までだって、少年期以来、そうでなかったことがあつただろうか。キングズミルでも下宿人だったし、ロンドンでも下宿人で、エクセターでも下宿人だった。いや、子供のときでさえも、彼は「ホームに住んでいる」気がしたことがなかった。物心ついたときから、彼は馴染みのものや人に囲まれていても、自分が場違いな気がしてならなかった。

(第四部第三節)

ロッキング住まいのピークと対照的に描かれているのが、ホワイトロ・カレッジ時代に親しかったバックランド・ウォリコムである。バックランドの家族はホワイトロ・カレッジのあったソーンホーから、もともと住んでいたデヴォン州に戻ってきていて、旅行でエクセターにきていたピークは、偶然、旧友

バックランドと再会し、彼の家に招かれる。その道すがら、自分の家について、バックランドは「今から君を連れて行く家は、三世代前からうちが所有しているものなんだよ」(第二部第三章)と事もなく言う。週単位か月単位の短い契約期間で間借りするロッキングとは異なり、バックランドの家は、はるか昔からウォリコム家のものなのだ。ピークはウォリコム家に滞在し、「このイングリッシュ・ホームというのは、物質的な進歩へのめりこむ時代において、確かに文明の最高の結実ではないだろうか」(第二部第四章)としみじみ思い、ホームに対する憧れを強くする。そして自分も上流階級の女性と結婚し、ホームを持つようになりたいと考えるようになる。そのために無神論者であるのに、勉強して牧師になるつもりだなどと突然宣言してしまうのだ。つまり、バックランドの家が、ピークの偽善のきっかけとなったと言えるのである。

ロッキングだけでなくフラットも、ギッシングの後期の作品ではエグザイルの住居として使われている。フラットは、労働者階級よりは富裕な中産階級のための大きな集合住宅で、後期ヴィクトリア朝に次々と建設された。ギッシングが一八八四年十一月から六年間住んだコーンウォール・レジデンスも、一八七二年に建てられたフラットだった¹⁾。ギッシングの住んでいた部分はなくなつてしまつたが、建物の他の部分は現在でも住居として使われている。

ギッシングの作品も『ネザー・ワールド』(一八八九年)以降、

題材がワーキング・クラスからミドル・クラスに変化したのに合わせて、作品中にフラットが描かれることが多くなっている。例えば、『渦』（一八九七年）の中で、カーナビー夫妻が住むオックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マンションというのは、一八七九年から八二年にかけて建設された、実在した高級フラットである。ほかに『三文文士』（一八九一年）のリアドンがエイミとの新婚の住居として選ぶのはリージェント・パーク近くのフラットで、『女王即位五十年祭の年に』（一八九五年）でビアトリス・フレンチが住むのはブリクストンのフラットとされている。

作品の中でギッシングは、フラットやロッキングに対して、常に嫌悪感を露にしている。『ヘンリー・ライクロフトの私記』（以下、『私記』と略記）では、「大都市のすべての住民、特にロッキング、下宿 (boarding house)、フラット、そのほか必要または愚かさのために考案された、さもしいホームの代替物に住めるすべての者」(『春』第一章) に対する憐れみを表している。太田氏も述べているように、ギッシングの登場人物が住むロッキングやフラットは、「住まいの変化が人間関係に微妙な影を落とし、その先に人間疎外が待っている時代を暗示している」⁽¹⁵⁾ のかもしれない。『私記』の中で、ギッシングは次のようにも述べている。

永久性という観念なくしてホームはありえないし、ホームなく

して文明というものはありえない。このことは、国民の大部分がいればフラット住まいの遊牧民と化したときになって、はじめてわが国も悟ることであろう。
(『冬』第十五章)

確かに、フラットやロッキングといった近代的な住居には自由な気楽さがある。しかし、それらはホームではないのだ。フラットやロッキングが都会に増加すればするほど、ホームを持たないエグザイルは増えてしまう。そしてそれは結果的に国家や文明に対する脅威になっていくと、ギッシングは警鐘を鳴らしているのだ。

ところで、ギッシングが「フラット住まいの遊牧民」やエグザイルの増加がもたらす文明の危機について書いていたのは、今から百年以上も前のことである。しかし、彼の言っていることはすべてそのまま現代の日本に対しても当てはまることだ。国土の狭い日本では、都市部の地価高騰を背景に、巨大なマンションや団地が数多く建てられてきた。それによって、壁一枚隔てて赤の他人同士が住み、お互い干渉することなく、地域社会にも貢献することもなく、ただ寝泊りしている状況が増えてきている。昔の日本と比べて、人間関係が希薄になったと感じる人が多いのも当然のことかもしれない。「永久性という観念なくしてホームはありえないし、ホームなくして文明というものはありえない」というギッシングの言葉は、現代の日本にも通じる言葉として、我々も胸に刻んでおくべきだろう。

第四節 「これが私の望みだった」

最後に、『流謫の地に生まれて』から約十一年後の一九〇三年に出版された『私記』を取り上げたい。ライクロフトはギッシングと同じように文筆業——ただし、小説に限らず「文学上の様々な形式を試みた」——で生計を立てていたが、五十歳になったときに、「期待してもいなかったほどの厚い友情を彼に抱いていたある知人が亡くなって、年間三百ポンドの終身年金が彼に遺贈されることになった」（「序章」）ため、デヴォン州エクセター近くの田園地帯に小さな田舎家（本書第五章・図⑤）を得て、隠居生活を送ることができるようになった。つまりライクロフトは晩年になってやっとホームを持つようになったのである¹⁶。

貧しく、ホームを持たないエグザイルとして長いこと暮らしてきたライクロフトは、「ホームを持つこと何ともの何とものいいようなない祝福感」を覚え、ホームに対する賛美を何度も口にする。例えば「春」の第二章には次のような箇所がある。

人生の大半、私はホームを持たない人間だった。色々なところを転々と移り住んできた。中には私が心底から嫌ったところもあったし、あるいは心地よく感じたところもあった。しかし今日に至るまで、我が家にして初めて感じるこゝろのできる、あの

安定感を味わいつつ住んだことは一度もなかった。運の悪いでき事や、よんどころない事情のために、いつなんどき追い出されるかも分からなかったのだ。

ライクロフトのホーム礼賛の言葉に表れているのは、「いつまでも我が家に住めるといふ安心感」（「夏」第十二章）を持つ喜びである。デヴォン州の田舎家はライクロフトが所有する家ではない。しかし二十年間という長期の契約がライクロフトの心に平安をもたらせてくれるのである。

『私記』も『流謫の地に生まれて』と同様、自伝的要素が強いことが注目される作品である。ライクロフトはギッシングの分身と解釈され、ライクロフトの経験はギッシングのものと理解できることが多い。例えば、若い頃、トテナム・コート・ロードの西側の横丁の地下のロッジングに住んでいたことなどは事実に沿っている。そこでは、「夜、ベッドで寝ていると、横丁を通して監視交代に向かう警官隊のザックザックという足音をよく聞いたものだ。ときには私の窓の上の鉄格子を重い足で踏むのが聞こえることもあった」（「春」第十章）と書かれている。これは、一八七八年に住んでいたコルヴィル・プレイス二十二番地（図④）のことである。ギッシングが住んでいた棟は、第二次世界大戦で爆撃を受け破壊されてしまい、建物のあったところは現在では小さな公園になっている。しかし、向かい側の同じ形態の建物は、当時のまま残されている。ここを訪れる

と、この横丁の突き当たりには今でも警察の支署があり、この地下のロッキングに住んでいたギッシングが、鉄格子越しに警官隊の足音を聞いていた様子がよく分かるのである。

しかし、『私記』を書いたライクロフトはギッシングが創った架空の人物であり、彼の遺した私記は、あくまでもギッシングの創作であることを忘れてはいけない。すべてがギッシングの経験に基づいているわけではないのだ。特にライクロフトのホームを得た喜びは、ギッシングには決して味わえなかったものののである。

『私記』を執筆していた当時のギッシングは、三人目の妻となったフランス人女性、ガブリエル・フルリとともにフランスで生活していた。イギリスでもなく、ギリシャやローマからも遠い異国での暮らしは、エグザイルの孤独を一層強く感じさせ



図④ 現在のコルヴィル・プレイス

ることとなったようである。フランスから、イギリスの友人エドワード・クロッドに宛てて書いた手紙には、相変わらずホームに対する強い憧れが表れている。

私が人のことで羨ましいと思うのは、ホームを持っていることだ。私は子供の頃からホームを持っていなかった。そして、今となつては、もう決して持つことはないだろうと思う。

(Letters 9: 146-47)

『私記』の巻頭には、この節のタイトルに用いた「これが私の望みだった」という意味の、ホラティウスの『諷刺詩』からのラテン語の引用 (Hoc est in votis) が載せられている。また、一九〇三年二月十一日にフレデリック・ハリソンに宛てた手紙の中でギッシングは『私記』について、この作品は「回想録メモワールというよりは願望アスピレーションを書いたものだ」(Letters 9: 58) と述べている。憧れのホームを持ち、お金の心配もなく、好きな古典を読んだり、イギリスの自然の中を散策したりして、のんびりとした日々を過ごすというのがギッシングの理想だったのだろう。ライクロフトと同じように、ギッシングも「もしかしたら、いつかはホームを持つことができるかもしれない」(「春」第二章) という期待を、長い間抱いてきたに違いない。しかし、五十歳を目前にし、そのような幸運が訪れることはもう自分自身には、今後もないだろうという諦めの気持ちが強くなっていたのでは

ないだろうか。それで自分と同様の過去を持つライクロフトという分身を創造し、彼に自身の願望を託したのでろう。つまり、ここでも、ギッシングのエグザイル性は彼の小説家としての創造力を助け、優れた作品を生む原動力となったと言える。ただし、ホームを持つことへの期待は、最後まで完全に捨てたわけではなかったようだ。ライクロフトの口を借りてギッシングは次のように述べている。

私はコスモポリタンではない。イギリスを離れた遠い異郷で死ぬ、などと考えただけでも、ぞつとしてしまう。

〔春〕第二章)

これを書いた時点で彼はフランスで暮らしていたが、いつかはまたイギリスに戻って、イギリスでホームを手に入れたと願っていたのだらう。しかし、その願いも空しく、『私記』が出版された一九〇三年の暮れに、ギッシングは風邪をこじらせて肺炎になり、そのままイギリスに帰ることなく亡くなってしまった。大陸旅行に出たまま、マラリア熱に感染してウィーンで客死したゴドウィン・ピークと同様、ギッシングは「死ぬときもエグザイルだった」(第七部第三章)のだ。イングラントを愛し、ホームを求め続けたギッシングにとっては、あまりにも皮肉な最期であった。

註

- (1) Eric Hobsbawm, *The Age of Revolution, 1789-1848* (New York: Vintage, 1966). 本書が取り上げている六十年間は、フランス革命と産業革命という二つの革命以外にも、世界を激変させた様々な「革命」が起こった時代だったのである。
- (2) 子供時代のこととは以下も参照のこと。Pierre Coustillas, ed., "Gissing's Reminiscences of His Father: An Unpublished Manuscript," *English Literature in Transition, 1880-1920*, 32.4 (1989): 427.
- (3) 小池滋『英国流立身出世と教育』(岩波新書、一九九二年)では、ヴィクトリア朝の立身出世のための教育熱が生んだ歪みの諸相を文学作品から論じている。
- (4) Geoffrey Best, *Mid-Victorian Britain, 1851-75* (London: Fontana, 1985) 170.
- (5) Richard Jenkins, *The Victorians and Ancient Greece* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1980) 61. 英国の学校教育における古典について、M. L. Clarke, *Classical Education in Britain* (Cambridge: Cambridge UP, 1959) が詳しい。
- (6) Jenkins 63.
- (7) ハーディもギッシングと同様の古典教育コンプレックスを抱いていた作家である。『日陰者ジュード』(一八九五年) 第二部第七章には、ハーディ自身を投影した主人公ジュードが、貧乏だが大学で勉強したいと考え、大学の街クライストミンスターに行くが、門前払いされ、酒場で自暴自棄になり、酔っ払ってクライストミンスターの大学生相手にラテン語の暗唱をしてみせる場面がある。
- (8) J. Percy Smith, ed., *Bernard Shaw and H. G. Wells* (Toronto: U of

Toronto P, 1995) 198.

(6) H. G. Wells, "George Gissing: An Impression" in *George Gissing and H. G. Wells: Their Friendship and Correspondence*, ed. Royal A. Gettman (Urbana: U of Illinois P, 1961) 264.

(10) Richard Dennis, "Buildings, Residences, and Mansions: George Gissing's 'prejudice against flats'" in *Gissing and the City*, 42.

(11) 富山太佳夫「漱石、夜逃げ、ヴィクトリア朝の引越し」『ポパイの影に——漱石／フォークナー／文化史』（みすず書房、一九九六年）一〇七～四四頁。

(12) Richard Dennis, "George Gissing (1857-1903): London's Restless Analyst," *Gissing Journal* 40.3 (2004): 1-15 を参照。二〇〇三年七月に没後百年を記念してロンドン大学で開催された学会では、最終日にキングズ・クロス駅周辺からリージェント・パークを抜けてベイカー・ストリート駅周辺にかけてのギッシングが住んだ数々の場所をまわるウォーキング・ツアーが開催された。この章に載せた写真は、主にそのときに筆者が撮ったものである。

(13) ジョーダン氏の場合はロッキングに住むという行為は、女性に対する支配とつながっていたようである。賃料を期日前に多めに払っておくことによって、自らの優位を確保しておきたかったのだ。実際、ロッキングの大家だったエルダーフィールド夫人と結婚してからは、逆に妻が家庭の中心になって切り盛りするようになったことに耐えられなくなって、家を出してしまふ。

(14) 大きな集合住宅を「マンション」と呼ぶのは和製英語だと思われるが、実はこれは後期ヴィクトリア朝に始まったことである。フラットに「大邸宅」という意味の「マンション」と名づけ

ることによって高級感を出し、より洗練された住人をひきつけようとしたのだ。ギッシングの住んだコーンウォール・レジデンスも、あるときからコーンウォール・マンションズへと名称が変更になったとギッシングは手紙に書いている (*Letters* 3: 228)。

(15) 太田良子『渦——ギッシングと姦通小説』『ギッシングの世界』（英宝社、二〇〇三年）二〇九頁。

(16) 『流謫の地に生まれて』の中で、ウォリコム氏の邸宅があるのもデヴォン州のエクセター近郊である。ギッシングにとってデヴォンは古き良きイングランドの理想的な土地だったのだらう。ギッシング自身、デヴォン州には一八九一年一月から九三年六月と、九七年二月から九八年七月まで住んでいた。